

「後期幕府直轄時代」(ついで) (6)

今回は、アイヌ民族に対する種痘の実施についてみてゆきます。

アイヌ民族の人口は文政5年(1822)には2万4千人あまりでしたが、安政元年(1854)には1万8千人あまりとなり、約30年間で25%近く減少しました。特に著しかったのは西蝦夷地(北海道の日本海

側)と奥蝦夷地(北海道の東北部)で、人口のほとんどを失った部落も少なくなくなりましたと云われています。

この時期、アイヌの人々は蝦夷地(アイヌ地)における唯一の労働力としてかけがえない存在でしたので、幕府としても人口減少を何とか防ぎたいと考えていたのです。

松前藩の防備

箱館奉行は、アイヌ民族の人口減少の対策として、結婚の奨励や、虐待の取り締まりを行うとともに、健康にも注意するよう働きかけます。また、アイヌ民族の幼児の死亡率が高いのは、服を着せずに裸同然で放置されているからだとし、安政5年(1858)より毎年7歳未満の幼児に無地木綿の綿入れ一枚を配布しました。

しかし、最も人口を減少

させた原因は、天然痘の流行でした。

天然痘の流行

天然痘が発生したコタン(アイヌ民族の村)は、直ちに患者から隔離するため健康な者を山中に避難させるしか方法がありませんでした。特に安政2年(1855)〜同4年(1857)にかけては、嶋小牧・寿都・歌葉・磯谷・岩内・古宇などて流行し、居住しているアイヌ民族の大半が死亡し

たと云われています。その後、渡島・胆振・日高・北見・石狩でも発生し、安政4年に箱館奉行は幕府に種痘医師の派遣を請願しました。

天然痘と種痘

天然痘とは疱瘡のことで、水膨れが出来て強い感染力があり、致死率が20〜50%と非常に高い病気です。種痘は、その天然痘の予防接種のことで、古くは西アジアや中国で天然痘患者の膿を接種して、軽い天然痘を起こさせ、接種された者が免疫を得る、人痘法が行われていました。安全ではありませんでした。それでは、1796年にイギリス人の医師のエドワード・ジエナーが、牛が感染する牛痘の膿を人間に用いた安全な牛痘法を考案し、これが世界中に広まったのです。

中川五郎治の種痘法

中川五郎治は本名を小針屋佐七といい、明和5年(1

768)に南部領陸奥国川内村(現青森県下北郡むつ市川内町)に生まれました。五郎治は、文化4年(1807)4月、択捉島の幕

府会所に番人として勤務中、ロシア船に番所を襲撃され捕虜となり、その後、日本に捕虜となっていたゴロブニン中佐との捕虜交換のため送還される事になります。そして、文化9年(1812)2月にオホーツクで

種痘書を手直しし、ロシア人医師の助手となり種痘法を取得します。同年8月4日にディアナ号副館長リコルドとともに国後島に上陸し、両国の使者となりますが、日本の役人の指示でリコルドにゴロブニンは死んだと伝えると、怒ったリコルドはたまたま通りかかった観世丸を襲い、高田屋嘉兵衛らをカムチャツカに連行しました。

日本に帰った五郎治は、幕府の出先機関である松前奉行の手代(小役人)となり、後に松前藩に仕えます。

日本で初めての種痘は、文政7年(1824)に五郎治により松前で実践され、種痘法を箱館や松前の医師に伝えました。

また、五郎治は種痘を秘術としていたため、知る者は少なかったとされていますが、ロシア語の種痘書は幕府の訳官により文政3年(1820)には和訳されてきました。

その後、安政4年(1857)、箱館奉行は蝦夷地(アイヌ地)での疱瘡流行に対し、江戸からの種痘医師により種痘を実施したので、惨害を免れることが出来ました。



松前公園内の中川五郎治碑文